

児童生徒の心理状態アンケートの指標と 不登校との関連解析について

赤尾 志保*, 河合 玲奈*, 梶 希代香*, 櫻田 廣友美*, 富岡 凜*,
中井 誉子*, 原 伶名*, 竹村 祐亮**, 安川 文朗***, 栗原 考次***, 中村 智洋***

Analysis of the Relationship Between Questionnaire Indicators Based on Students' Psychological State and School Refusal

Shiho Akao*, Reina Kawai*, Kiyoka Kanba*, Kotomi Sakurada*, Rin Tomioka*,
Homare Nakai*, Reina Hara*, Yusuke Takemura**, Fumiaki Yasukawa***, Kouji Kurihara***
and Tomohiro Nakamura***

1. はじめに

近年、日本の小・中・高等学校における長期欠席（長欠）は増加傾向にあり、その人数は令和6年度で過去最多となっている[1]。この状況を踏まえ、全国の不登校群（児童・保護者・教師）と登校群（児童・保護者・教師）を対象に、不登校の関連要因を明らかにするために大規模なアンケート調査を実施した結果、主要要因とし「無気力・不安」が回答者の約50%認められ、児童生徒の心理的要因が関係している可能性が示唆された[2]。また、不登校経験者の内省的語りを分析し、対人関係を中心とする学校要因・家庭の機能不全（親の精神・身体問題や離婚・経済困窮）・心身症状という学校・家庭・自分の三つが複雑に絡み合い、特に不安定な親子関係（アタッチメント）と対人関係の問題が不登校の重要な背景であることが示唆されている[3]。不登校の増加要因として身体症状・心理要因・家庭や学校環境が関与する点を指摘し、早期介入と生活リズム調整、行動療法、学校・地域との連携による個別支援の重要性も示されている[4]。文部科学省の詳細な調査でも、多くの児童生徒が学校生活上のストレス、身体不調、生活リズムの乱れ、対人関係の不安など、複数の要因を同時に抱えていることが明らかになっている[5]。これらの結果は、不登校が単一要因では説明できず、心理・家庭・学校環境が重層的に影響するという近年の知見と一致している。さらに「中学生の登校を巡る意識の変化と欠席/欠席願望の抑制要因」の研究では、中学生の欠席行動には「自信の低下」「対人関係の不安」「家庭環境」「学習意欲の

* 共筆頭著者

*,*** 京都女子大学 データサイエンス学部 (Faculty of Data Science, Kyoto Women's University, Japan)

** 京都女子大学 データサイエンス研究所 (Institute of Data Science, Kyoto Women's University, Japan)

対応著者：中村 智洋 E-mail: nakamurat@kyoto-wu.ac.jp

低下」など多因子的構造が存在することが示されている [6]。これらはいずれも心理状態や学校適応感を定量的に把握する必要性を裏付けるものである。

一方で、兵庫県西宮市では「こころん・サーモ」システムにより、西宮市内の全小中学生に対し、年2回以上、心の状態を測定 [7] しており、「こころん・サーモ」の34項目の質問データを用いて心理状態の変化と不登校リスクの関係を明らかにし、不登校となるリスクおよび不登校になりにくいリスク要因を特定している [8]。この結果をもとに西宮市では不登校予兆における情報システムを構築し、不登校学生の減少の実装化が進められている。

本研究では、「こころん・サーモ」の34項目から分類される12個の指標（ソーシャルサポート、充足的達成、競争的達成、運動の有能感、身体的強靱性、心理的強靱性、問題焦点対処、情動焦点対処、実在感、自尊心、集団生活スキル、理由付け）に着目し、これら12指標と長欠との関連リスクの関連解析を行った。

2. 方法

本研究では、西宮市と武庫川女子大学が共同開発した児童生徒向け心理状態チェックシステム「こころん・サーモ」の回答データを用いて、回答データと不登校との関連分析を行う。「こころん・サーモ」は2022年度から西宮市内の全小中学校で本格導入されており、小学校5年生から中学3年生までを対象にタブレットで年2回以上実施されている [7]。「こころん・サーモ」は34の質問項目から構成されており、各質問に対し「全くそう思わない」「あまりそう思わない」「少しそう思う」「とてもそう思う」の4件法の回答を設けている。34項目はそれぞれ12指標のいずれかに該当する。「こころん・サーモ」の各項目と指標について表1にまとめる。

本研究では、4件法の回答でネガティブな回答を選択するほど点数を高くつけ、不登校とネガティブな回答との関連解析を行う。すなわち、34項目のうちネガティブな質問項目（12, 13, 15, 16）については「全くそう思わない = 0点」「あまりそう思わない = 1点」「少しそう思う = 2点」「とてもそう思う = 3点」の配点を、34項目のうちポジティブな質問項目（1 ~ 11, 14, 17 ~ 34）については「全くそう思わない = 3点」「あまりそう思わない = 2点」「少しそう思う = 1点」「とてもそう思う = 0点」の配点とした。また、長欠については、長欠記録データ（学校の出欠管理システム）および文部科学省 [9] を参考にし、欠席が年度内に30日以上に達しており、不登校と判断される場合を長欠ありとした。

表1 「こころん・サーモ」の34項目と12指標

質問項目	指標	質問内容
1	ソーシャル	学校のことで困った時に相談できる友だちや先生、家族はいますか。
2		学校が終わってからや休みの日に遊ぶ友だちはいますか。
3		いやなことや苦手なことがあったとき、話ができる友だちはいますか。
4	充足的達成	勉強や係の仕事、そうじなどいやなことでも最後までがんばることができますか。
5		勉強したり本を読んだりして新しいことを学ぶのは楽しいと思いますか。
6		クラスの人から、すごいと思われたり、お家の人、先生にほめられたらうれしいですか。
7	競争的達成	勉強や運動などで他の人に負けたくないと思いますか。
8		学校や学級の中で、すごいと言われたいですか。
9	運動の有能感	身体を動かすことが好きですか。
10		自分は運動ができると思いますか。
11		休み時間は、教室よりも外で遊ぶ方が好きですか。
12	身体的強靱性	学校の行事などでがんばった次の日に、元気がなくなることはありますか。
13		6時間目まで授業のある日は、いつもより早く寝てしまうことがありますか。
14	心理的強靱性	いやなことがあっても、すぐに気持ちを切り替えることができますか。
15		友だちから注意をされたとき、イライラした気持ちになりやすいですか。
16		先生に怒られた時は、いやな気持ちが続きますか。
17	問題焦点対処	できないことがあったときには、次はできるようになるために、どのようにすればよいか考えることができますか。
18		友だちとケンカをしたときに、どうすれば仲直りができるのかを考えることができますか。
19	情動焦点対処	何かよくないことをしたときに、自分の悪かったところを素直に話せますか。
20		教室でイライラすることがあった時は、だれかに話を聞いてもらうことですっきりしますか。
21	実存感	自分には他の人にないいところがあると思いますか。
22		あなたは、クラスの人達から好かれている、仲間だと思われていると思いますか。
23	自尊心	クラスの中で自分は役に立っていると思いますか。
24		友達の考え方が自分とちがった時、受け入れることができますか。
25	集団生活スキル	けんかしそうになった時は、一度止まって考えることができますか。
26		授業中はむだ話をしないで、先生の言うことに集中できますか。
27		相手の立場にたって考えてみるすることができますか。
28		先生や友達が話しているとき、自分が話したいことがあっても、順番を守ることができますか。
29		自分がまちがってしまった時、素直にあやまることができますか。
30		友達が失敗してもゆるすことができますか。
31		先生やお家の人に注意されたとき、自分の行動に問題があったかどうか考えることができますか。
32	理由づけ	正しいかどうかを簡単には決められない時でも、自分なりの考えを持てますか。
33		してもよいかどうかを考える時、その理由についてよく考えますか。
34		自分の中で考えがまとまらないときも、面倒にならずにしっかりと決められますか。

3. 統計解析

参加者特性として、長欠の有無に対する参加者の性別、学年、各指標との間に関連があるかどうか、カテゴリカルデータについてはカイ二乗検定またはFisherの正確検定を、連続データについてはマン・ホイットニーのU検定を行った。また、「こころん・サーモ」の指標と長欠の関連解析については、目的変数を長欠の有無、説明変数を「こころん・サーモ」の12指標の点数（連続量）、調整変数として性別と学年を用いたロジスティック回帰分析を行い、各指標の1点上昇辺りの長欠のリスクとしてオッズ比とその95%信頼区間（confidence interval, CI）を算出した。次に、「こころん・サーモ」の12指標のうち長欠と正に関連すると特定された指標について、指標の連続量を全ての0/1のカットオフとした全パターン（17,496通り）の説明変数に対し、調整変数として性別と学年、目的変数を長欠の有無としたロジスティック回帰分析を行い、また、長欠の予測能として各カット

オフに対するロジスティック回帰モデルに対する area under the curve (AUC) を求め、AUC が最も高くなる最適なカットオフを算出した。最後に、長欠の予測等、社会実装する場合の現場の負担も鑑み、長欠と正に関連すると特定された指標について、簡便化された3群 (low, intermediate, high) の長欠リスクスコア [10] の算出を試みた。統計解析ソフトには R. ver4.5.1 を用い、 p 値 <0.05 のときに統計学的有意差ありと判断した。

4. 結果

「こころん・サーモ」回答者は 18,794 人で 62,520 レコードであった。レコードの内訳は小学 5 年が 14,655(23.4%)、小学 6 年が 14,251(22.8%)、中学 1 年が 16,619(26.6%)、中学 2 年が 11,244(18.0%)、中学 3 年が最も少なく 5,751(9.2%) であった。このうち「こころん・サーモ」の 34 項目のうち少なくとも 1 つの欠損がある者を除外したところ、18,406 人で 57,024 レコードとなった。欠損で除外されたレコードの内訳は小学 5 年が 1,436(9.8%)、小学 6 年が 1,385(9.7%)、中学 1 年が 994(6.0%)、中学 2 年が 838(7.5%)、中学 3 年が 843(14.7%) であった。複数回答がある者は初回回答を採用し、解析対象者数はこの 18,406 人とした。このフローチャートを図 1 に示す。

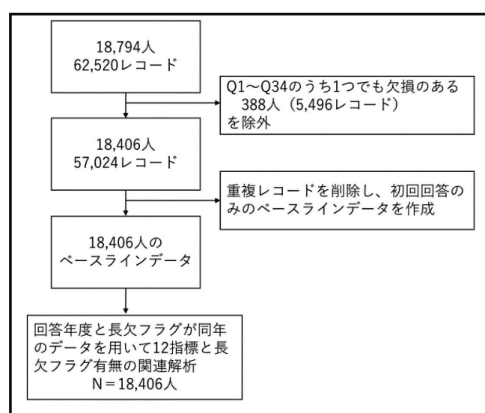


図 1 参加者のフローチャート

参加者の特性を表 2 にまとめる。複数回答がある者は初回回答を採用しているため学年の高い中学 2,3 年の回答者数が少なくなっている。長欠の有無と性別には関連は見られなかった (p 値 $=0.891$) が、長欠の有無と学年には有意な関連が認められた (p 値 <0.001)。また、長欠の有無と「こころん・サーモ」の各指標の関連について、ソーシャルサポート、充足的達成、競争的達成、運動の有能感、身体的強靱性、情動焦点対処、実在感、自尊心、理由付けは、それぞれ長欠なしの者に比し、長欠ありの者の方が有意に指標の点数が高かった (ネガティブであった)。

表2 参加者の特性

参加者の特性	長欠なし (n=17,591), n(%)	長欠あり (n=815), n(%)	p 値
性別			
男性	9,029(51.3)	416(51.0)	0.891
女性	8,561(48.7)	399(49.0)	
不明	1(0.0)	0(0.0)	
学年			
小学 5 年	9,353	408	<0.001
小学 6 年	3,596	155	
中学 1 年	4,289	196	
中学 2 年	279	31	
中学 3 年	74	25	
こころん・サーモの指標			
ソーシャルサポート	1(0, 2)	1(0, 3)	<0.001
充足的達成	1(1, 3)	2(1, 3)	0.002
競争的達成	2(0, 3)	2(1, 3)	<0.001
運動の有能感	3(1, 5)	3(2, 6)	<0.001
身体的強靱性	2(1, 3)	2(1, 3)	<0.001
心理的強靱性	4(3, 6)	4(3, 6)	0.458
問題焦点対処	2(1, 3)	2(1, 3)	0.779
情動焦点対処	2(1, 3)	2(1, 3)	0.044
実在感	2(1, 3)	2(1, 4)	<0.001
自尊心	2(1, 3)	2(2, 3)	<0.001
集団生活スキル	6(3, 8)	6(3, 8)	0.716
理由付け	3(2, 4)	3(2, 4)	0.026

「こころん・サーモ」の指標の特性は中央値 (第 1 四分位 , 第 3 四分位) を示す

次に目的変数を長欠の有無, 説明変数を「こころん・サーモ」の 12 指標の点数 (連続量), 調整変数として性別と学年を用いたロジスティック回帰分析を行ったときの p 値, オッズ比とその 95% 信頼区間および AUC の結果を表 3 に示す.

表3 「こころん・サーモ」の12指標と長欠の有無のロジスティック回帰
(AUC = 0.624)

指標 (点数範囲)	p 値	オッズ比 (95%CI)
ソーシャルサポート (0 - 12)	0.001	1.07(1.03-1.12)
充足的達成 (0 - 12)	0.832	1.01(0.95-1.06)
競争的達成 (0 - 8)	0.061	1.05(0.998-1.11)
運動の有能感 (0 - 12)	0.011	1.04(1.01-1.08)
身体的強靱性 (0 - 8)	<0.001	1.17(1.12-1.22)
心理的強靱性 (0 - 12)	0.149	0.97(0.93-1.01)
問題焦点対処 (0 - 8)	0.040	0.93(0.86-0.996)
情動焦点対処 (0 - 8)	0.657	1.02(0.95-1.08)
実在感 (0 - 8)	0.767	0.99(0.93-1.05)
自尊心 (0 - 8)	0.013	1.11(1.02-1.20)
集団生活スキル (0 - 28)	0.055	0.97(0.94-1.001)
理由付け (0 - 12)	0.392	1.02(0.97-1.08)

12 指標のうち、ソーシャルサポート、運動の有能感、身体的強靱性、自尊心の4指標は、4件法の回答で1段階ネガティブ回答をすると長欠となるオッズ比はそれぞれ1.07, 1.04, 1.17, 1.11と有意なリスクとなっている（いずれもp値<0.05）。一方で、問題焦点対処の指標は4件法の回答で1段階ネガティブ回答をすると非長欠となるオッズ比は0.93と有意な非リスクとなっている（p値<0.05）。すなわち、問題焦点対処の指標は4件法の回答で1段階ポジティブ回答をすると長欠となるオッズ比は $1/0.93 = 1.08$ となる（p値<0.05）。

表3で有意となった5指標について、本来であれば4件法の回答で段階ごとに（線形的に）長欠リスクが上がるというよりは、ある合計点数以上/以下といったカットオフで長欠リスクを評価する方が自然と思われる。例えば、精神的苦痛をスクリーニングする質問紙(Kessler 6, K6)[11]では、6項目の質問紙の5件法の回答で0～4点で採点し、0～24点の範囲をとる。日本語版K6でも十分な信頼性・妥当性が確認されており[12]、13点以上で心理的苦痛ありと判断される。12指標それぞれの最適なカットオフを探す場合、12点満点の指標が5つ、8点満点の指標が6つ、28点満点の指標が1つなので、全指標のカットオフの組合せは $12^5 \times 8^6 \times 28$ 通りで兆を超えてしまい全ての組み合わせのロジスティック回帰分析を行うことは現実的ではない。そこで表3で有意となった5指標に限定し、指標の連続量を全ての0/1のカットオフとした全パターンの説明変数に対し、調整変数として性別と学年、目的変数を長欠の有無としたロジスティック回帰分析を行い、各カットオフでのロジスティック回帰モデルに対するAUCを求め、最適なカットオフを算出した。5指標の点数分布は、ソーシャルサポート（0～9点）、運動の有能感（0～9点）、身体的強靱性（0～6点）、問題焦点対処（0～6点）、自尊心（0～6点）であったので、指標の連

続量を全ての 0/1 のカットオフとした全パターンは $9^2 \times 6^3 = 17,496$ 通りであった。その回数分のロジスティック回帰分析を実施したところ、 $AUC = 0.620$ のパターンで一番 AUC が高かった。このときのロジスティック回帰分析の結果を表 4 に示す。尚、問題焦点対処についてはポジティブ回答が長欠リスクとなるため、指標の点数を反転させて表示する。

表 4 表 3 で有意となった 5 指標の 0/1 カットオフに対し最も高い $AUC (= 0.620)$ に対するロジスティック回帰分析の結果

指標	標準化 回帰係数	カットオフ	オッズ比 (95% CI)	リスク スコア	p 値
ソーシャルサポート (0 ～ 9 点)	0.145	1 点以下	ref. (1.00)		< 0.001
		2 点以上	1.35(1.16-1.57)	1	
運動の有能感 (0 ～ 9 点)	0.132	4 点以下	ref. (1.00)		< 0.001
		5 点以上	1.33(1.14-1.56)	1	
身体的強靱性 (0 ～ 6 点)	0.194	2 点以下	ref. (1.00)		< 0.001
		3 点以上	1.50(1.30-1.73)	2	
問題焦点対処 (0 ～ 6 点)	0.138	1 点以上	ref. (1.00)		< 0.001
		0 点	1.41(1.17-1.71)	1	
自尊心 (0 ～ 6 点)	0.132	1 点以下	ref. (1.00)		< 0.001
		2 点以上	1.34(1.11-1.61)	1	

ソーシャルサポートは「1 点以下 / 2 点以上」、運動の有能感は「4 点以下 / 5 点以上」、身体的強靱性は「2 点以下 / 3 点以上」、問題焦点対処は「1 点以上 / 0 点」、自尊心は「1 点以下 / 2 点以上」の指標のカットオフ組合せの時に最も高い $AUC = 0.620$ となった。また各指標において、ref に対し、いずれもオッズ比が 1 を有意に超えており、いずれも長欠のリスク要因となっている。

表 4 の解析において、リスクスコアを簡便化するために、[13] をもとに標準化回帰係数の大きさに応じてリスクスコアを付与すると、0 ～ 6 点の範囲となる。この範囲からリスクスコアを 3 群 (low, intermediate, high) に分けたとき、この 3 群を説明変数、性別と学年を調整変数としたときのロジスティック回帰分析を行い、 AUC が最大となる長欠リスクスコアのリスクカテゴリー 3 群 (low, intermediate, high) の算出を試みた結果を表 5 にまとめる。

表5 ロジスティック回帰分析の AUC が最大となる長欠リスクスコアの組合せ
(AUC = 0.611)

リスクカテゴリー	オッズ比 (95%CI)	p 値
low risk (0 ～ 1 点)	ref(1.00)	
intermediate risk (2 点)	1.38(1.11-1.72)	0.004
high risk (3 ～ 6 点)	2.23(1.86-2.68)	< 0.001

low risk に比し, intermediate risk で長欠となるオッズ比は 1.38 (p 値=0.004) であり, high risk で長欠となるオッズ比は 2.23 (p 値<0.001) とリスクが大きくなるにつれてオッズ比も上昇している. また, 表 3,4 の解析に比し, 表 5 の解析では簡便なリスクスコアでロジスティック回帰分析を行っているが, AUC の値は大きく下がらず, 長欠の予測精度も大きく下がることはないと思われる. リスクスコアとリスクカテゴリーに分けた後の人数分布を表 6 にまとめる.

表6 リスクスコアとリスクカテゴリーに分けた後の人数分布

リスクスコア	長欠なし	長欠あり	長欠率 (%)
0	1,344	26	1.9
1	4,399	135	3.0
2	4,300	168	3.8
3	4,036	251	5.9
4	2,263	139	5.8
5	1,196	84	6.6
6	53	12	18.5
リスクカテゴリー	長欠なし	長欠あり	長欠率 (%)
low risk (0 ～ 1 点)	5,743	161	2.7
intermediate risk (2 点)	4,300	168	3.8
high risk (3 ～ 6 点)	7,548	486	6.0

表 6 より, リスクスコアに加えてリスクカテゴリーに分けた後の分布でも, リスクスコアまたはリスクカテゴリーの上昇とともに長欠率も上昇しており, リスクスコアの付与方法およびリスクカテゴリーの分け方について, 適切であるものと思われる.

5. 考察

本研究において、ソーシャルサポート、運動の有能感、身体的強靱性、自尊心は点数が低い者（ネガティブ回答）で、また、問題焦点対処は点数が高い者（ポジティブ回答）で、それぞれ有意な長欠リスクとなっていた。ソーシャルサポートに関し、教師からの自律性支援への認知が学校適応感に大きな影響を与えることが示されている [13]。また、学校拒否行動は単なる生徒個人の「不安」や「わがまま」だけでなく、教師による自律性支援の認知や仲間との関係性などの学校環境要因（ソーシャルサポートの質）によって強く影響を受けることが示されている [14]。

運動の有能感に関し、運動の有能感と長欠リスクとの直接的な関連については明確に述べられていないものの、自分は運動ができると自己認識している子どもほど心理的な健康問題が少ない傾向にあることが示されている [15]。また、学校拒否行動のリスクの背景には運動の有能感の低さが関与している可能性について言及されている [14]。

身体的強靱性については、1年目に比較的欠席が多かった中学生は2年目にうつ病および行動上の問題が増加する傾向がある [16]。すなわち、欠席がうつの発症・悪化に寄与し得るという因果方向を示す結果であり、これは本研究で想定している因果とは逆向きの可能性を示唆しており、欠席とうつの間に一定の関連が存在することを示している。その他に、心理的な健康状態（内面化問題）が学校拒否行動のリスクを高めている報告もある [14]。

自尊心については、学校拒否行動のリスクを高める背景に自己有能感の低さが関与している可能性について言及されている [14]。

問題焦点対処について、問題焦点対処が高いにも関わらず長欠に至るケースについては、生徒個人の努力だけでは解決できない環境要因（自律性支援の欠如など）が存在し、過剰適応を起こしている可能性が示唆される [13]。また、成人労働者を対象とした研究において、問題焦点対処が長欠リスクの低下や休業期間の短縮と関連すると報告されている [17]。しかし、今回の小学生から中学生を対象とした分析では同様の傾向は必ずしも明確には示されなかった。この相違の一因として、対処行動の内実に着目する必要があると考えられる。すなわち、「問題焦点対処」として一括りに扱われるその内部には情報収集・計画立案・支援要請など性質の異なる行動が含まれており、複数の方向性を持つ対処行動を単一カテゴリーとして扱うことで結果が平均化・相殺され、本来の関連が過小評価されている可能性がある。さらに成人労働者と児童生徒とでは置かれた環境が大きく異なる。労働者は業務調整や休暇取得の裁量を持つのにに対し、児童は学校や家庭の管理下にあり、状況を自ら改善する手段が限定される。そのため問題焦点型対処が行動変容に直結しにくく、内部差の影響がより顕在化した可能性がある。

6. まとめ

本研究において、ロジスティック回帰分析を用いることで、長欠と有意に関連する「こころん・サーモ」の指標を特定し、その特定された「こころん・サーモ」の指標から、長欠を予測する各指標の最適なカットオフを求めた。また、そのカットオフをもとにした各指標からのリスクスコアを算出し、リスクスコアを3カテゴリーに分け、各リスクスコアカテゴリーから長欠を予測するモデルを構築した。

一方で、本研究にはいくつかの研究の限界がある。本研究において求めた AUC は 0.6 程度と、その予測能はあまり高くないため、他にも長欠のリスク要因となる項目があると考えられる。また、本研究は断面研究のため「こころん・サーモ」の指標の点数が不良なので長欠となったのか、それとも、長欠となったため「こころん・サーモ」の指標の点数が不良となったのか因果関係が不明、つまり、因果の逆転の可能性がある。今後、追跡調査でのデータを用いた解析が必要であると思われる。

今後の課題として、本研究では断面研究において長欠となる「こころん・サーモ」の指標のリスク要因を特定し、その予測の精度が最もよくなる各指標のカットオフを求めたが、そのカットオフの妥当性検証は未実施である。本カットオフの妥当性研究として、別のデータに当てはめた検証研究を行うべきである。また、本研究では、「こころん・サーモ」の 34 項目のうち少なくとも 1 つの欠損がある者、複数回答がある者は初回回答を採用、回答年度と長欠の有無が同年のデータを解析対象とした。今後は長欠あるいは非長欠が続く者、あるいは、長欠から非長欠となった者を含めた追跡調査での統計解析を行うことにより長欠となる要因探索を行いたい。

参考文献：

- [1] 文部科学省 (2025). 令和 6 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要. https://www.mext.go.jp/content/20251029-mxt_jidou02-100002753_2_5.pdf. 参照 2025/12/05.
- [2] 文部科学省 (2024). 文部科学省委託事業不登校の要因分析に関する調査研究結果の概要. https://www.mext.go.jp/content/20251120-mxt_jidou02-100002768_2.pdf. 参照 2025/11/30.
- [3] 小柴孝子 (2017). 不登校発生の背景要因に関する研究—不登校経験者による内省的語り
の質的分析— https://www.jstage.jst.go.jp/article/jafp/31/1/31_43/_pdf. 参照 2025/12/10.
- [4] 藤田光江 (2024). 不登校の実情と対応. https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjpm/64/2/64_64.2_113/_pdf. 参照 2025/12/10.
- [5] 文部科学省 (2021). 不登校実態把握調査報告書.

- https://www.mext.go.jp/content/20211006-mxt_jidou02-000018318_03.pdf?utm_source=chatgpt.com. 参照 2025/12/13.
- [6] 本間友巳 (2000). 中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析. 教育心理学研究 48(1) 32-41.
- [7] 武庫川女子大学 (2022). 武庫川女子大学の研究から生まれた心理データ収集システム「ころん・サーモ」西宮市の全小中学校で本格運用をスタート。
<https://www.mukogawa-u.ac.jp/special/pdf/release/20220601-02.pdf>. 参照 2025/11/24.
- [8] 荒川清晟, 谷口麻衣, 迫田英之, 松浦紘丈, 伊藤大樹, 藤岡謙一, 岡崎州祐, 稲澤晋, 西岡健児, 大野昂紀, 竹村祐亮, 中村智洋, 安川文朗, 栗原考次 (2025). 児童生徒の心理状態と不登校の関連. 2025 年社会情報学会大会.
- [9] 文部科学省 (2024). 令和 5 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要.
https://www.mext.go.jp/content/20241031-mxt_jidou02-100002753_2_2.pdf. 参照 2025/11/24.
- [10] Waku Hatta, Takuji Gotoda, Tsuneo Oyama, Noboru Kawata, Akiko Takahashi, Yoshikazu Yoshifuku, Shu Hoteya, Masahiro Nakagawa, Masaaki Hirano, Mitsuru Esaki, Mitsuru Matsuda, Ken Ohnita, Kohei Yamanouchi, Motoyuki Yoshida, Osamu Dohi, Jun Takada, Keiko Tanaka, Shinya Yamada, Tsuyotoshi Tsuji, Hiroataka Ito, Yoshiaki Hayashi, Naoki Nakaya, Tomohiro Nakamura, Tooru Shimosegawa (2017). A Scoring System to Stratify Curability after Endoscopic Submucosal Dissection for Early Gastric Cancer: "eCura system", AMERICAN JOURNAL OF GASTROENTEROLOGY 112(6) 874-881.
- [11] Kessler RC, Andrews G, Colpe LJ et al. (2002). Short screening scales to monitor population prevalences and trends in non-specific psychological distress. Psychol. Med. 32: 959-976.
- [12] Furukawa TA, Kessler RC, Slade T, Andrews G. (2003). The performance of the K6 and K10 screening scales for psychological distress in the Australian National Survey of Mental Health and Well-Being. Psychol. Med. 33: 357-362.
- [13] 岩佐康, 石崎和也, 日原尚吾 (2023). 中学生及び高校生における教師の自律性支援への認知と学校適応感: 教育相談への示唆.
https://www.baiko.ac.jp/university/files/uploads/bulletin_56_iwasa_ishizaki_hihara.pdf.
- [14] Carolina González, Ricardo Sanmartín, María Vicent, José Manuel García-Fernández (2021). Exploring different types of school refusers through latent profile analysis and school-related stress association. Sci Prog. 104(3).
- [15] Migle Baceviciene, Rasa Jankauskiene and Arunas Emeljanovas (2019). Self-perception of physical activity and fitness is related to lower psychosomatic health symptoms in adolescents

with unhealthy lifestyles. BMC Public Health. 19(1):980.

- [16] Jeffrey J. Wood, Sarah D. Lynne, David A. Langer, Patricia A. Wood, Shaunna L. Clark, J. Mark Eddy, and Nicholas Ialongo (2012). School Attendance Problems and Youth Psychopathology: Structural Cross-Lagged Regression Models in Three Longitudinal Datasets, Child Dev. 83(1):351-366.
- [17] van Rhenen, W., Schaufeli, W. B., van Dijk, F. J. H., & Blonk, R. W. B. (2008). Coping and sickness absence. International Archives of Occupational and Environmental Health. 81, 461-472.

謝辞

兵庫県西宮市で実施されている「こころん・サーモ」システムにより測定されたデータをご提供いただき、また、本論文の作成に関し有益なコメントをいただきました兵庫県西宮市役所の皆様に深く御礼申し上げます。また、本調査にご回答いただいた調査対象者の皆様に心から感謝申し上げます。

(2026 年 2 月 8 日 受付)